三尾重定編輯

新編小學讀本第三 下

大日本教育會書籍館
第一室
一〇九一号
九冊
三架
五函

福羽美静閲
三尾重定編

新編小學讀本第三

東京　教育書院藏

明治十九年三月二十三日内務省贈付

帝國教育會

新編小學讀本第三下

福羽美静閲
三尾重定編

第一

師匠父母の我を嘖るハ。我に學藝智識をあたへて。その德望を得せしめんお爲なり。然に。其命をまも

るさを能ず。或まさ。師匠父母の面前へ出るさを厭ふ小兒ハ。終に其身の方向を誤りて。困窮卑賤ヨおちいるさをあるべー

古語に。益者三友。損者三友。といふさをあり。此さハ。方正なる人。直諒なる人。或また。その見聞ヨ富たる人に交るときハ。我に益あり。僻事をなす人。口弁を以てさとをまぐる人。善を惡とを擇ぶさとをふく。たゞ其人の言語につくがさを。氣骨のなき人ヨ交る時ハ。かならず我に損ありとなり

人ハ大抵。ワガ言ニ從フ者ヲ好ミ。

我言ニ逆フ者ヲ忌キラヘルハ是ソノ智識ノ足ザルガ故ナリ

汝等ヨクコレヲ思ヘ我ニ從フ者ハソノ學ソノ智ノ我ニ及ザルニ由ニアラズヤ其學其智ワレニ及ザル程ノ人ニ親ミ交リテ何ニカセンヤ苟學識智德ヲ高クセント思ハヾ好デ我ニ抗スルホドノ人ヲ友トスベシ

第二

朋友ハ種々の名あり。あるひハ金蘭。或腹心。或刎頸。或忘年。或口頭。或竹馬の類なり

兒輩よ。近く來るべー。余汝等に朋

友の故事を語りき
かすゑし
金蘭とい。金と蘭との
二ツ。して。金い堅く。
蘭い芳し。され
バ朋友ハ。い。話を
和ラげ交る時い。其ハとば

のかうばしきハ。蘭の如く。また
災殃ハあひ。互に死力を竭して。防
ぎ助ル其勢ヒい。金鏃の如く。堅きと
なる。故に。ハれを金蘭のまじはる
と。ふ
腹心とい。互に隔なく。親み交りて其
心を一にするゑ故に。ハまを稱し

て腹心といふ

刎頸といたとひ頸を刎らるゝとも其人の爲まいさたしも厭ひさけざるといふを以テ其を名づけて刎頸の友といふ

忘年といふ其學其技のたゝまゝ就て齡の多少を論ぜるたとふく老少

またしく交る故に忘年の友といふへるなり

口頭といふ意い相あいざれしごも言語の上ふて親くそるを口頭のまゞはまとふ

竹馬といふ幼稚の時よまあひ親みて永くたゝ祖の易らざるを竹馬

の友とハ名づくるなり。されば幼少のとき竹馬に乗て共に遊びしゆゑなるべし

第三

尺蠖トイフ蟲ハ其形カヒコニ似テ木葉ヲ喰ヒ老レバ則室ヲ造リテ其中ニ入リ終ニ化シテ蛾トナルナリ此蟲サキヘ出ントスルニハ首尾ヲ合セテ屈シテ後ニ伸ルナリ其狀人ノ大指ト食指トヲ以テ物ノ尺ヲ量ルガ如シ故ニ名ヅケテ「シヤクトリムシ」ト云人モ亦カクノ如ク其志ヲ達セントト思ハヾ夙ニ起キ夜ニ寢テ心ヲ碎キ身ヲ

痛メ。ヨク其艱苦ニタヘ忍ビテ屈伸ノ理ニ違フ勿レ

多くの童子。雨の降るを詠め居さり。一人の小兒。老人の前ゝゆき。雨いかにして降るものなるや。と問ひきゞ。老人その兒を顧て。汝ハ賢きものなる。余汝の爲に。其理を

語り聞さべし

凡物ハ無盡性といひて。盡るさゝなき者なる。然ども。他の力によりて變化せるさゝを常なりとす。譬ば。さゝの火鉢ゝかけさる鐵瓶の水を看よ。はじめハ鐵瓶一杯ゝ滿たきども其湯のわきあがるに隨て。漸

弟前書院

に減少し。愈沸騰して止ざる時ハ。遂ニすべての水を無きに至る。其水全きえ失たるにあらず。外物の爲ニ變化して。みな空中にとび

散るなり。雨ハ則其の理ニして。地中の水氣。空中ニ上り。冷氣に遇て。雨となりて降るものなり。とぞ教ける

第三

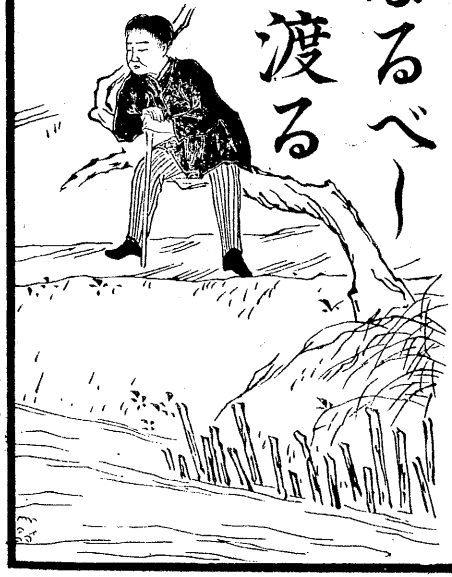
氣候ハ四時ニヨリテ。寒溫冷熱ノ差アリ。サレバ。人ノ衣服モ。亦コレ

ニ隨ハザルベカラズ

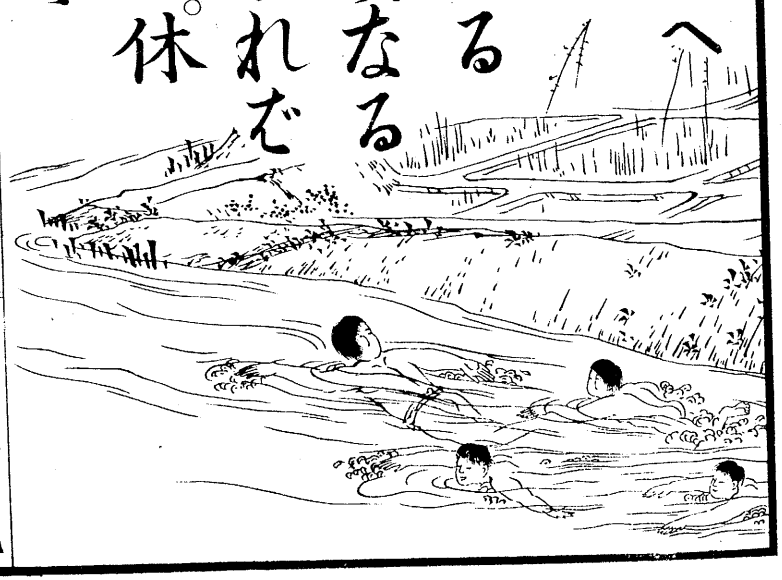
衣服ノ染色ニハ種々アレドモ夏ハ多ク白キヲ用ヰ冬ハ多ク黑キヲ好ムハ皆ソノ基ク處アル故ナリ或コレヲ試驗シテ白色ハ大陽ノ熱ヲ遠ザケ黑色ハ其熱ヲ引ノ性アル事ヲ發明セリ

其試驗の方法ハ二ツの皿に氷を乙り一方ハ白色の布をおほひ一方ハ黑色の布を用ゐて均くさゝきを日光に曝せしに白色の布を覆ひさる皿ハ其氷とくるこゝをおそく黑色の方ハその融るさと速なるしといふ

數多の人流を冒して游泳せり。大人あり小童に向ひ一人の壯士岸に上りて兒童の方に目を注ぐハ是その游泳の師なるべし其の技ハ海河を渡る事を業とせる人ハ勿論それよ



かゝらざる人とハ雖ども不慮の水害にかゝ陥ることあるよ當りてハ緊要なる業なり一術なりされど汝等夏日學校の休暇なるよハ宜く



さの技を學ぶべし。然どもさきを習ふにハ。必さの業に熟練せる。大人に從ひて。其教を受く。亟きあり。否だ。たゞに其業の。以さづら事とふはのみならず。其命をも失ふに至るさをあるべし

第四

多クノ人。一室ニ會スル時ハ。ヨクソノ窻ヲアケ放テ。空氣ノ流通ヲ謀ルベシ。人々吸フトコロノ。酸素ト云モノハ。躰中ノ炭素。トイヘルニ混合テ。炭酸瓦斯トナリ。復口中ヨリ。出ルモノナリ。此氣漸室内ニ盈ルトキハ。或眩暈頭痛ヲ發シ。或

マタ嘔吐ヲ催シ甚キニ至テハ卒ニ倒テ一時ハ前後ヲ覺エザルニ至ル。サレバ學校ソノ外一室ニ在テ衆人同ク會スル所ニテハ時々戶外ニ出テ新シキ空氣ヲ呼吸スベシ。其家煉瓦ニシテ窓ニガラスヲ用ヰタル室ナドニテハ殊ニ意

ヲ注クベシ

人の身躰ハ强弱を論せず常に沐浴して其身を洗ひ清むべし。凡て身躰ヨハ小き孔ありて其身ヨ熱を發する時ハかならず汗の出るものなり。汗ハづきハ熱散ずて快し。然るに沐浴を怠る時ハ垢の爲ヨ

孔ふさがゐて汗ハでゐ故に其熱うちに籠りて遂に病をひきおこすに至るべし

第五

運動ハ身體の血液をめぐらして其身の成長を助るのみならず病をさゐ元氣をはして精神つねに爽快なり

然ども人の身體ハ天稟の強弱ありもし運動して其身の適度をあやまつ時ハ身躰つかれて病

を起さゝせるべし

さきバ。其身の剛柔を慮りて。よく其動止に注意さゝべし。その疲勞を救ふまゝ。休息と睡眠とのみ休息ハ。四肢ノ疲ヲ回復シ。又ヨク消化機關ノ運用ヲ。助ルモノナルガユヱニ。運動シタル後ニハ。カナラズ務メテ休息スベシ

睡眠ハ。身心ヲ安カラシメテ。身体ヲ養フノ効。最多シト爲ストイヘドモ。ソノ眠ル丁。多時ニ渉レバ。反テ害トナル者ナリ。殊ニ食後ハ。消化機關ノ運轉スル丁。極テ微弱ナルモノナレバ。決シテ眠リニツクコ

トナカレ

人ハかならず其質を異ふせ。故に。その性質と。その習慣とによりて。休息及睡眠の時を減ず。て。專その業を勉強せと雖。敢て其身に。苦勞を覺えざる者あり。斯の如き人ハ。老衰を來せハ速なるこ。或まさ

輕症の病よかゝりて。頓に其死を以たせハをなるべし

斯の如く說き來ればバ。怠惰を以て害なき者と爲せに似たれども。決して然らず。休息と睡眠とに。夥多の時間を費せときハ。筋骨ゆるみて。精神鈍く。生涯懶惰の廢人となり。

K110.8～67-3

空歳月を送る故に。貧窮困苦その身を責て。惡心妄想されより發り。終よい貴き天壽をも。全そるさいを得ざるに至るべし。恐れ慎むべきさいをにあらずや

新編小學讀本第三下畢

板權免許　明治十九年一月廿五日

刻成出版　同年三月

定價金六錢五厘

編輯者　愛知縣士族　三尾重定　神田區五軒町十九番地

出版者　東京府士族　岩田富美　淺草區西鳥越町十番地

出版并發賣人　東京府士族　吉澤富太郎　本所區松井町三町目十番地

編輯書籍出版之章